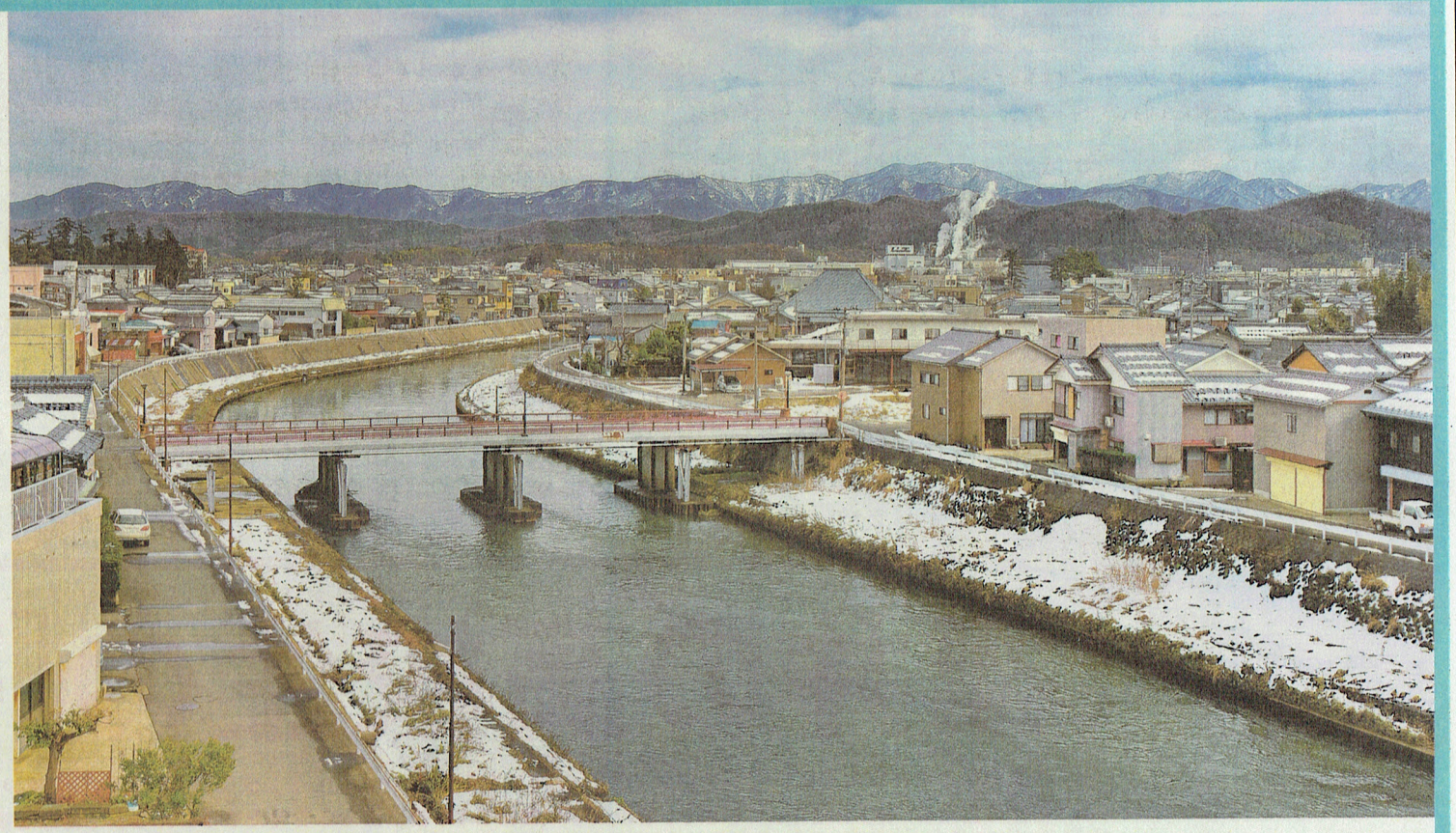
ふくい 川のめぐみとともに

身近な自然である川
わたしたちはこの流れとともに
さまざまな物語を育んできました



竹田川

撮影場所：あわら市

九頭竜川の支流で、福井と石川の県境、坂井市丸岡町の丈競山（たけくらべやま・標高1045m）を水源とする一級河川。龍ケ鼻ダムを経て坂井市を北西方向に曲折しながら北に流れ、あわら市を東西に貫流。河口付近（坂井市三国町汐見）で九頭竜川に合流し、日本海に注ぐ。延長41.9km、流域面積は208.6平方km。宮谷川のほか、兵庫川、熊坂川、権世川、田島川、五味川などの支流がある。

水運がもたらした富と繁栄

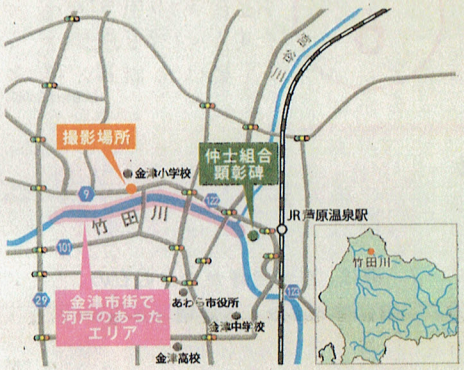
竹田川は流域に大きな富と繁栄をもたらした「恵みの川」である。その入り口となったのは、川縁に設けられた階段状の「河戸（こうど）」と呼ばれる船着き場。旧金津市街には13カ所の河戸があり、ここから北前船の寄港地・三国湊へと物資が送り出され運び込まれた。

金津地区では古くから製鉄が重要な産業で、金津の地名は「鉄（金）を集散する川港（津）」を意味する。竹田川による鉄の輸送は街に富をもたらし、年貢米や海産物、薪炭などの生活必需品が運ばれた。もちろん野菜や衣類などを洗う生活の場としての河戸も確保され、すべての住民が川の恩恵を享受して暮らしていたのだ。

しかし1897年（明治30年）の北陸本線金津駅完成により、物資輸送の手段は水運から陸運へと大きく舵を切られる。この変革期に、水陸荷役に携わる「金津仲士（なかし）」たちは新たな物流組織をつくろうと、組合を設立。彼らは三国湊から船で物資を運び、列車に積み込む作業を請け負うことになったが、1911年（明治44年）の国鉄三国線開通により活躍の場は激減する。生活のための河戸も不要になり、いつしかすべて姿を消してしまった。

JR芦原温泉駅近くの竹田川の脇に、金津仲士組合の顕彰碑がある。地区の寺の隅で眠っていたものを、地元の有志によりここに据えられたのだと、ふるさと語ろう会会長の牧田孝男さんが教えてくれた。街の中央を流れ、まちづくりの起点となってきた竹田川。北陸新幹線開通を控えた今だからこそ、川の恵みで生きていた時代を忘れてはならないと牧田さんは言う。

竹田川の脇に鎮つ金津仲士組合を顕彰する石碑



企画・制作：福井新聞社営業局